

〔書評〕

三木 栄編著『朝鮮医事年表』

『朝鮮医学史及疾病史』『朝鮮医書誌』に続いて、このたび『朝鮮医事年表』が三木栄氏の手により刊行された。六十年に亘る御努力の成果である。三木氏は、朝鮮医誌は、一、朝鮮医書誌

二、朝鮮医事年表 三、朝鮮医学史及び疾病史からなる、としておられる。今回の出版により、この三部作が完成をみた。衷心よりお喜びを申し上げたい。

三木氏は『朝鮮医学史及疾病史』の総序に「よって朝鮮医学の闡明と云うことは、朝鮮自体のその様相を知り得るばかりでなく近隣国外の医学文化をも比考し得る点に於いても、緊急にして重要な研究題目である。しかしながら、朝鮮医学史の研究は何人にも開拓せられていない。朝鮮医学は、アジア医学史上の大きな空白の分野である。『不通朝鮮医学、不可以説日本乃中国医学。』と述べておられる。事実、三木氏以前には、朝鮮医学史に対する研究はほとんど見られない。僅かにまとまったものとしては、李能和氏の『朝鮮医薬発達史』（一九三一年）があるが、これとて本格的なものとは言い難い。正に、三木氏は前人未踏のいばらの道を開拓された、といっても過言ではあるまい。今日では、金斗鍾氏の『韓国医学史』『韓国医学文化年表』、フン・スノン氏の『朝鮮保健史』などが著され、三木氏に続いている。

しかしながら、三木氏のこのような努力にもかかわらず、事態

は改善したとは思えない。

一つは、事実認識の問題である。三木氏は『朝鮮医書誌』の中で『針灸折日編集』について「しかしして羅氏は本書を明医の著と見なしており、また謝氏の『中国医学源流論』にも同じく明人の著として紹介する所がある。このように中国人でさえ朝鮮書を中国書となすが如き大きい誤りを冒している。この一事をもつても朝鮮医学研究の必要性が痛感される。」と述べておられる。

にもかかわらず、三木氏の指摘は一向に受け入れられてはいない。例えば、M氏は最近の論文（昭和五十八年九月十七日発刊）の中で、『針灸折日編集』を「一四四七年（明正統十二）に全循義等により編集された針灸書。」としている。M氏は、東洋医学史を専攻され、特に医書誌を扱われていると聞く。このM氏にして、上記の如くである。

いま一つ重要な問題は、「不通朝鮮医学、不可以説日本及中国医学」という点である。「中国医学は朝鮮を経て、日本に伝入了た。」という表現が横行する。この「経て」とは何を意味するのか。多くの場合、単に通過の意で用いられている。このような見解は重大な誤りと言わざるを得ない。「朝鮮には、それ固有の医学があり、これに秦漢以来大陸から流伝した中国医学、またこれと融合し醸成された医学があり」との三木氏の実証的論証による指摘にもかかわらず、誤れる常識はいまなお修正されてはいない。三木氏等の研究成果に基づいて、さらなる啓蒙が、先ずは医史学者として東洋医学研究者に必要なのである。

状況は、三木氏が朝鮮医学史の研究を開始された六十年前とさ

ほど変化はないのである。三木氏一人が、少なくとも日本においては、突出していたともいえる。いや、言い過ぎかもしれない。

今度の『朝鮮医事年表』は、日本医史学会と日本東洋医学会の協力によって刊行された。状況は好転しているのかもしれない。

『朝鮮医事年表』について、一つだけ不満を述べさせていただけ。近代の扱いである。内容について論じたいが、紙数もない。端的に言えば、「代行政治期」と題された部分である。正に、この標題にこそ、問題が象徴されている。三木氏自身がその渦中におられたことを除外しても、いやだからこそ、この歴史観は問われねばならない。

(梁 哲周)

〔 憚思文閣出版 一九八五年発行
五九〇ページ 二〇、〇〇〇円 〕

長木大三著『北里柴三郎』

北里研究所では一九七四年、創立六十周年を迎え、記念事業の一つとして創立者北里柴三郎の論説集を刊行した。欧文篇(四五六ページ、一九七七年刊)と邦文篇(一六五六ページ、一九七八年刊)との二部から成る。

欧文篇は、北里が欧文(多くは独文)で発表した学術論文を蒐録したもので、彼の超人的努力と輝かしい成功に至る過程とを知るのに不可欠のものである。一方、邦文篇は彼のドイツ留学以前から逝去前年に至る間に邦文で発表された学術論文はもとより、演説、講話のほか、祝・弔辞までも収録したもので、彼の人となり、彼の考え方、また、時代背景を知るのに、これまた不可欠のものである。

この度発刊された長木大三著『北里柴三郎』は、前記『北里柴三郎論説集(邦文篇)』に収録されている主要な論説について、随時、原文を引用しつつ、著者がコメントを加えながら紹介したものである。

著者は、これまで詳細な記述が比較的乏しかった北里の多方面にわたる、学者としてのみならず、医学者として、また、医政者としての実践活動を理解して貰うために本書を書いたと述べているが、その目的は充分に達せられていよう。

また、著者は、人生とは、人と人との出会いの場と述べているが、北里が大をなすについても多くの方々、例えば長与専斎、福澤諭吉などの出会いがどれ程重要なものであったか、本書によ

つて読者はよく理解されるに違いない。

ただ、本書を通読した中で、評者の気にかかった二つの事を述べさせて頂く。

北里の、恩師ローベルニ・コッホに対する尊崇の念は、神に対する如きものであり、北里は、コッホはジェンナー、バストールに比肩するのみならず、医学の学術面での開拓、貢献においては古今東西その右に出ずる者は無いと考えているが、評者の気になるのは、北里が、リスターの外科手術における消毒法の創設が、コッホの「創傷伝染病の原因に就て」の研究（一八七八）に則つて開拓せられたと述べている点である。本書においても、このように紹介されている。しかし、リスターは早くからバストールの仕事に注目し、腐敗が微生物によつて起こるといふバストールの発見に触発されて一八六七年外科消毒法を創設したといわれている。コッホがリスターの発見に及ぼした影響については、別に、医史学的に充分検討せられねばなるまい。

つぎに、著者は、抗毒素の発見者である北里にノーベル賞が与えられなかったことを非常に残念がつておられる。ノーベル賞が新しい学理発見の先権者に与えられるものとすれば著者の所説の通りであるが、著者が、北里がノーベル賞を逸したのは、北里を快く思っていなかった東大側の推薦が足りなかったためではないかと憶測しておられるのは甚だ気にかかる点である。第一回ノーベル医学生理学賞がどのような選考手続を経て与えられたか、医史学的に充分検討され明らかにされた上でなくてはこのような云えないのではなからうか。

北里の不朽の業績の絶対価値は、ノーベル賞授与の有無により左右されるものでない。

ともあれ、新刊『北里柴三郎』の出現により、北里はにわか身近なものとなった。本書を媒体として、わが国の生んだ偉人北里の本格的研究が愈々旺んになることを期待したい。

（添川 正夫）

〔慶応通信株式会社発行一九八六年 A五判〕
一五九ページ 一、八〇〇円

酒井 恒訳編『ターヘル・アナトミア解體新書』

昭和四十九年は『解體新書』五巻が刊行されて二百年目にあたり、記念行事が催された。この年の二年前の四十七年九月に仙台で開催された日本医史学会第七三回総会において、酒井恒氏による「ターヘル・アナトミアについて(その一)」と題した報告がなされ注目目的となった。というのは、解體新書の原本であるクルムス著『解剖学表』(蘭訳本、一七三四年版)の完訳を目差し、その上で解體新書の内容と照合し再吟味を試みたいという研究計画を伺ったからである。

周知の通り、解剖学表は精密な二十八図からなる解剖図を柱とし、これに簡潔な本文、そして本文の五倍以上を占める膨大な脚注とから構成されている。解體新書は原本のうち解剖図と本文のみの漢訳書である。これまで解體新書に関する数多くの研究報告がみられるが、脚注の取扱いは必要最小限度にとどまっていて、隔靴搔痒の感が強かった。そして多くの人が、解剖学表の蘭訳原書の完訳をどなたがなし遂げて下さり、いつかは身近な文献として読むことのできる事への、はなはだ虫がいい願望をもっていたといえよう。

酒井教授の『解剖学表』と『解體新書』にかかわる研究発表は、その後十三年間の長きにわたり毎年の総会に連続して行なわれてきた(第八四回総会のみ休まれた)。そして解體新書刊行二百周年目にあたる五十九年の名古屋での第八五回総会の会長講演において、「いわゆるターヘル・アナトミアの脚注について」と題して、

多年の研究の集大成を報告され、参会者は肝銘をうけた。医史学研究で同一課題のもと、これほどまでに掘り下げられた報告は他に例をみない。この一大研究成果がこのほど名古屋大学出版会より刊行された表題の書籍である。

本書の概要についてはすでに、会員各位には出版元より内容見本が送られている筈であるからここでは触れない。オランダ語を独学で習得され、「先入観による誤解を避けるため、解體新書やその訳本は一切見ないで原書の翻訳に集中」された酒井教授のご苦心についても新聞や報道でご存じのことと思う。ここに完訳された『解剖学表』に接し得て、身近に読ませていただくことは、今後の医史学研究において新たな視点にたった活発な考察の展開をみるであらう。有難いことである。

これは分にすぎたことであるが、原書の柱である銅版画の精密な解剖図は、写真製版による復刻では細かい線が欠けてしまっている。筋系や内臓諸器官の細かい点をはじめ、例えば原書第十八図にみられる、右上腕をしばって前腕の皮静脈を浮きあがらせての図説や、第二十七図にみられる羊膜内に浮遊している胎児の図などである。明和八年三月に杉田玄白や前野良沢らを感じさせ即刻翻訳へと駆り立てしめた原動力となったであらう、原図の持つ深みをつかむことはできない。解剖学表は今日では、稀覯書であるが、研究者は是非とも原書に一度は接する必要がある。

酒井教授は原書と解體新書とを対比されて「二百年以上前に刊行された解體新書の内容は、肉眼解剖学の分野では現代のものとはほぼ同じレベルにある素晴らしい書である」と評価されている。

そして今後はさらに、『解剖学表』の原典のドイツ語版とフランス語版、ラテン語版の各訳書を翻訳比較検討される計画をもっておられる。その研究の成果が今から期待される。

(神谷 敏郎)

〔名古屋大学出版会 一九八六年発行
七六一ページ 三〇、〇〇〇円〕

矢数道明先生退職記念『東洋医学論集』

本書は矢数道明先生が東洋医学研究所を退任されるのを記念して、研究所の所員ならびに関係者が執筆した論文集である。内容は広汎かつ多彩で、本草学、医学史、書誌学、伝統医学などに及んでいる。書評を依頼されたが、筆者の及ぶ所でない。僅かに簡単な紹介と読後の所感を述べるに止まることをお祈り願いたい。

伊豆縮砂の思い出(木村氏)は生薬の規格や代用品の知識は先人の努力の結果であることを教えられた。植物と動物(丁氏)では植物の成分に動物の生理的活性物質の存在指摘し、また漢方薬中に免疫調節(物質)アラビノガラクトン(山田氏)の存在を示し、MHRと漢方(荒川氏)ではモデル動物を使用する際の陥り易い誤を指摘し、これらは将来のこの方向の研究に示唆を与えた。免疫調節剤としての漢方(花輪氏)では免疫調節作用のある多糖体の存在を示し、新しい治療学の確立を提唱した。黄連解毒湯(広田氏)を川崎病に使用した成績を詳細に分析し、その効果を示し、また文献を考察した。但し本邦先哲の文献には触れてない。皮膚筋炎の一例(原氏)はステロイドと小柴胡湯、温清飲のエキスの併用で、ステロイドの減量に成功した。気の医学(間中氏)ではこの難しい課題を明解に解説した。古代における大黄(大塚氏)では大黄使用の初期の文献を東西にわたり紹介論評した。五味論説(真柳氏)では、内経系医学の論を紹介し、一般の五行論との関連について論評した。中国中世における中毒(小曾戸氏)では諸病源候論を中心に中毒の記載を現代科学的観

点から検討された。著書の言う実験科学を導入した医史学研究的発展に期待したい。金元医学研究序説（石田氏）では従来の誤解ないし偏見を訂正し、将来研究する者の指標を示した。四花患門穴の淵源と伝承（石原氏）では種々の伝本を考証し、この灸法では敵氏濟生方を推薦した。古書断簡考（小曾戸氏）ではわが国平安鎌倉時代に筆写された断簡を、その所在とその内容について調査研究された。これは古医書に広い知識がないと不可能である。

五雲子伝（戸田氏）ではその詳細を紹介した、明治以前の文献では多紀氏の医賸の短文のほかみられないので貴重である。読扁鶴伝割解（荒木氏）は割解の時代的背景や内容の紹介のみならず著者図南の考へ方に論及した。また図南は陳吳と自称したが、後の桂山の彙攷が果して劉項たり得たか否か、本論文の続編に期待したい。山田椿庭の金匱要略の考証（寺師氏）では椿庭の考証の綿密さの一端を紹介した。江戸時代の伝統医学の教育（丸山氏）では主として江戸医学館、熊本再春館、和歌山の医学館について紹介した。近世医学の変遷とその背景（平馬氏）と漢方各家学説の確立に向けて（安井氏）とでは最近の調査をふまえて纏めた好論説である。とくに中国医書の輸入と和刻、本邦古医書の出版の記述は多大の興味を引いた。旧温知社遺品、浅井家遺品の解説（医史文献研究室）では貴重な資料を示された。情報系に対する干渉としての針灸（間中、板谷氏）は針灸の理論的根拠として、神経系統によらない新しい信号系を提唱した。WHOと伝統医学（丁氏）WHO 伝統医学研究協力センター認定までを振り返って（丁氏）では WHO と研究所との関係を述べられた。矢數先生の外来管

見（臨床研究室）は貴重な報告である。先哲の治験例はそのまま治療体系と考え易いが、日常の治療はその門人か或は診療簿を見なければ軽々に診断できないからである。

要するにすべて貴重な興味ある論説である。広く江湖に推薦したい。

紙数制限もあり、簡約にしたので誤解したとお叱りを受けるであろう。御寛容を乞う次第である。

（長谷川弥人）

医聖社 一九八六年 A五判
三九四ページ 九、五〇〇円

奥富敬之著『神奈川県伊勢原市域医療史概観』

奥富敬之氏がこの度、『神奈川県伊勢原市域医療史概観』という九〇〇ページに及ぶ大冊を出版された。同じ県内に住む私として、こうした地方医史の発刊は誠に有難いことである。著者は早稲田大学博士課程修了、日本医大で歴史学担当の歴史家である。原始時代は巫医、古代は官医、中世は僧医、近世は儒医がおおむね医療の中心であったという著者の想定の下に、本書は近代篇と近現代篇の二部に大別され、第一部は次の五章から成り立っている。

- (1) 原始医療と巫医の構造
- (2) 古代医療と官医の存在
- (3) 中世医療と僧医の伝統
- (4) 近世医療と儒医の滲透
- (5) 近代医療と漢洋の交替

第二部は伊勢原市医師会成立後の近代、現代篇である。

著者があとがきで述懐しているように、医療に関する史料不足と、伊勢原市史の刊行がないため、執筆には苦勞の跡が見られる。医療とはあまり関係のない市史に関する部分もかなり多い。神奈川県を東西に二分する相模川の西端に位する伊勢原は北に大山を擁し、南は海に接する。位置と地形、気候風土の自然的環境と、交通、人口、産業等の人文的環境の記述から本書は始まっている。

古代医療では、大陸医方の伝来、韓医方、漢方、仏教医方の伝

来が述べられる。相模国が成立したのは大化改新（六四五）の翌年との説もあるが、それ以前であろうと推定され、相武、師長の古語や寒川神社にも言及されている。律令制度、典藥寮の構成が説明される。僧医は律令制ではきびしく禁止されるが、奈良時代には報酬なしで許可される。しかし、僧医が定着するのは鎌倉時代以降である。平安時代の八四四年相模介に任じられた橘朝臣永範が自力で「救急院」という医療施設を作ったことは異例のことで相模の良吏にのべられている。これより先、七三五年頃、赤斑瘡が全国的に流行したさい、相模介に任じられた吉田連宜と七八〇年頃の吉田連斐太麻呂の名も見える。

日向薬師の開山が行基であり、大山阿夫利神社が良弁であるという伝説があるが、これも史実に反することが、種々の文献引用によって説かれているのも興味深い。

鎌倉時代になると、源頼朝や北條氏が日向薬師や大山寺を信仰したこともよるが、この二つは当地方の医療信仰対象となっていた。

鎌倉時代は軍陣外科も発達し、消毒の観念もあつたらしく、産科でも中条流が行われた。ただし古今の秘法伝授だけで公開されないため、資料不足で確証は少ない。また、「本道」という呼称は富士川游氏によれば室町時代に名付けられたというが、著者は文献によりそれ以前であろうと推定する。

伊勢原と関係の深い田代三喜、太田道灌にも触れている。

江戸時代になると、医家の名もぼつぼつ現れてくる。御典医としての船橋氏、曾谷氏、高麗氏、勝田氏はいずれも詳細な系図を

示して詳しく書かれている。

村医の登場、開業医の世界では多数の川柳が記され、代脈、御免駕籠などから当時の医者の世界が想像される。庶民医療としては医療担当の寺社としては薬師信仰が過半数である。七十三種におよぶ民間療法も記される。

近現代篇では伊勢原市医師会成立後の開業医の様子、東海大学病院設立、休日診療所開設等現代に及んでいる。

本書は伊勢原地域の歴史と医療史を兼ねた好著である。

(大滝 紀雄)

伊勢原市医師会 一九八六年 A五判

八八〇ページ 非売品

医学博士 文学博士 矢数道明著

『明治17年漢方医学の変遷と将来、漢方略史年表』

明治初年、時の新政権によって世の表舞台から追放された漢方医学が、第二次大戦の後に、不死鳥のように蘇ってきた。

昭和四十三年は、恰も明治百年に当たった。この時本書の著者は、漢方興亡の歴史を記録して後世に残すことを思い立った。そして、多くの資料と、昭和二十九年以来自ら克明に記録して毎月「漢方の臨牀」誌に掲載している「漢方界のメモ」に基づいて先ず「明治百年漢方略史年表」を編纂し、次いで昭和五十三年にはその後の十年間を加えて「明治110年漢方略史年表」を発刊した。今回、更にその後の七年間のメモを加えた年表と共に、漢方の歴史を顧み、且つ将来を展望する著者の論説を加えて、本書を著した。

年表は精細で、日本国内のみにとどまらず国際的動向をも把握している。また資料は、幕末以後の貴重なものを満載している。

昭和初年以來、漢方医学の復興に自らたずさわった著者の、正に常人ではなし得ない記録の集積である。

(山田 光胤)

春陽堂 一九七九年 A五判 二二〇ページ

統編・年表 四、〇〇〇円

中村禎里編『遺伝学の歩みと現代生物学』

メンデルが死没(一八八四年)後、百有余年を閲する。このとき、「メンデル遺伝学の創始と再発見の時代をかえりみ、あわせて現在の生物学と社会における遺伝学の役割を検討」(本書「まえがき」)してみるのは、まことに時宜にかなったことといえよう。とくに、遺伝子操作や男女産み分けのような新技術の功罪が日常的にマスコミでも論じられる現在、遺伝学の見直しは、遺伝学や生物学を専門としない人にとっても必要なことであろう。

生物学史研究の第一人者、中村禎里氏が、自らも二つの章を分担しながら、気鋭の生物学者・科学史家を執筆陣に選び、編纂されたものが本書である。標題を見て遺伝学の通史を期待する向きには若干の失望が残るであろうし、教科書風の読み物でもない。執筆者が各自の研究領域を、それぞれの問題意識を反映させながら、力量豊かに語った論文集と、本書を性格づけることができよう。

本書の構成は二部に分かれる。第一部「遺伝学の成立」は、「メンデルの遺伝理論」(中村禎里)、「十九世紀の遺伝学(1)——ノーゲリを中心に」(小川真里子)、「十九世紀の遺伝学(2)——ノーダンを中心に」(大和靖子)、「遺伝理論の再発見」(中村禎里)の四章より成り、第二部「現代の遺伝学」は、「二十世紀における分子生物学の発展」(大林雅之)、「動物の発生と遺伝学」(尾里建二郎)、「集団生物学の適応論と遺伝学」(岸由二)、「社会における遺伝学」(溝口元)の各章で構成されている。

まず第一部では、メンデルの遺伝理論の成立過程とその時代背景が扱われている。種は不変か否か、換言すれば進化の問題は、十九世紀生物学の最大の論点であったし、商品価値のある植物を求めての交配実験は、時代の要請でもあった。メンデルの外にも交配実験を試みた者は多い。だが、なぜメンデルのみが正しい遺伝理論を構築することができたか、また彼の理論が、なぜ三十五年の間、理解されないままであったのか。それは、中村氏の二編の論文によって明晰に語られている。さらに、同時代に交配実験を行いつつも、ついに正しい遺伝理論に到達できなかった例として、小川氏はノーゲリを、大和氏はノーダンを取り上げ、それぞれ綿密周到な評論を加えている。メンデルの特色は、これらの同時代人と比較することによって、より鮮明となる。

第二部では、まず大林氏が、「再発見」以降の遺伝学の流れを概観し、遺伝子の実体から分子生物学の成立にいたる道筋を、簡にして要を得た語り口で述べている。分子生物学は、大腸菌やファージを主材料として研究されたが、多細胞生物では、細胞分化と形態形成という更なる難問が加わる。尾里氏の論文では、「現代の遺伝学がどのようにしてこの発生現象に迫っているか」が、トランスジェニックアニマルやホメオボックスの研究を例として、具体的に説明されている。また岸氏は、「自然選択論に的を絞って集団遺伝学と進化生態学をとりあげ、メンデル遺伝学の束縛のもとにある二つの異なるスタイルの適応論を概観」している。分子レベル・個体レベル・集団レベルと、一見大きな隔りがあるように思える生物学諸領域が、実は同根のものである

ことを読者は知ることができる。

最終章で溝口氏は、優生思想と断種法、知能や犯罪傾向は遺伝するか否かの論争、遺伝子操作による遺伝病の治療の問題といった、まさに遺伝学と社会とのかかわりの実例をかずかず挙げ、遺伝学が一般市民と無縁のものでは決してないことを示唆している。

先に本書を論文集と性格づけたが、こうしてみると、各章はばらばらのようでありながら、実は互いに有機的連関を保ち、編纂者の意図は見事に貫徹されていることを知るのである。遺伝学の見直しには好個の書といえよう。各章の終わりには、行き届いた文献案内が付されている。

(檜木田辰彦)

培風館 東京 一九八六年六月 A五判
vi 十一八三ページ 一、六〇〇円

古川 明著『切手が語る医学のあゆみ』

切手は小さな枠の中に文化をつめこんで、広く人々の目に触れさせることの出来る不思議な媒体である。

七十年来この世界の魅力にとりつかれつづけた古川明先生が、御専門の医学との結びつきに焦点を絞って研究を始められてからでも半世紀が過ぎたという。そして十数年にわたって連載された医学切手の話題を取り集めて、再び手を加えて上梓された。これは「切手が語る医学のあゆみ」と名づけられたが、「古川切手学大系」と呼んでみたいような、有意義で面白く歯応えのある名著になった。

これはもう切手の本ではない。医学史の本でもない。また絵入りの医学人名辞典でもない。そのいづれにも通用し、しかもそこに先生の人生観と主張がしっかりと息づいている。

巻末の著者略歴の写真の縁が切手特有の目打ち模様になっていて、切手と共に歩む先生の心意気を示している。

この本について多くを述べれば、美しい切手の上に乗ったりと消印を押すのと同じになりそうなのでやめるが、切手の理解のために日本医史学会に入会された先生が医史学の進歩のために果された貢献は計り知れないものがある。

今後の医学切手の数多い発行が先生の研究意欲を一層かきたてて続篇が世に出ることを心から祈るものである。(大林 敏郎)

医歯薬出版株式会社 一九八五年 B五判
五六五ページ 九、八〇〇円

五十嵐金三郎編著『浅田宗伯書簡集』

本書は浅田宗伯翁の書簡、主として服部甫菴翁に贈ったものを影印し、それを活字印刷にし、注を加えたもので、さらに解説として、その書誌的事項、両翁の伝記資料、両翁の親交の模様ならびにその時代背景について述べ、最後に両翁に関する年譜が附されている。

浅田翁の書は筆力雄勁で、活字教育された現代人には読解容易でない。著者も「あとがき」にて述べている如く、苦辛して資料を集め読解されたもので、その努力と精勵とに、はじめに敬服と称賛の辞を捧げたい。

本書は序文の矢数先生や著者の指摘する如く、明治漢方の既倒の波濤を回さんとする浅田翁の心情と当時の世相や人の動静を後世に伝える重要な資料であることは勿論であるが、多くの貴重な興味あることが発見できる。二三例をあげると。

(一) 高野山本傷寒論は浅田翁が躋寿館校書勤務中の頃、尾台良作により紀州邸より得たもので、好古の士の集會にて、種々の理由をあげて偽作であると評定却下された。

(二) 温古秘録、古方録粹、古方備要、古方別體などは評判宜しけれど袴窓の晋唐方選が第一等である。

(三) 清国へ官命により、躋寿館医籍備考(高島、岡田撰)を、朝鮮に医方類聚を送ったことまた脚気鈎要(今村了菴著)が英訳されたことをあげ、老後の愉快これに過ぎずと。

(四) 喜多村直寛翁の墓碑の建立、谷中墓地の不動明王像の安置

に関する裏話。などなど。

著者の解説は懇切を極め、これ亦当時を知る貴重な文である。とくに評者の目を引いたのは、両翁の親交は甫菴翁の孫が浅田塾へ入門以後とした安西氏の明治先哲医話の説を訂正し、それ以前よりとした点である。栗栖栖園の書、月筵雅集(寄せ書)の写真を示されたことも多大の喜びであった。

最後に誤植は本邦出版物の避けられない宿命であろうが、それを二三発見できた。順賀川は須賀川(三一五頁)、塩岩為寿は黒岩為寿(三二四頁)などである。しかしこれはほんの微瑕で本書の価値を減ずるものでない。

要するに本書は明治初中年の医学史にとって貴重な資料で、その解説によってその価値を一段と高めたものであると信ずる。多く同好の士に推薦する所以である。妄評深謝す。

汲古書院 一九八六年 A五判
三三四ページ 三、〇〇〇円

(長谷川弥人)

佐藤昌介解題『洋学者稿本集』

本書は、天理図書館善本叢書と書之部第八十巻（第六期第十二回配本）で、同館蔵の洋学者の稿本類の主要なものを収録し、佐藤昌介氏が解題を担当している。

従来から、医史学研究者の間で著名な、シーボルトの手術記録『シーボルト直伝方治療方写取』と『シーボルト治療日記』（ともに宮原良碩筆記）や、シーボルト門の岡研介自筆『生機論』（わが国最初の生理学書）のほかに、評者がかねてから注目し解題者にその存在を知らせていた洋学者の貼交帳『蘭香』で収められ、その全貌を窺うことができるようになったことは喜ばしい。

もっとも、この『蘭香』（佐々木信綱旧蔵竹柏園文庫本）は、洋学者の書簡を主に、解剖見学入覧券（宇田川榕菴ら発行）、和製カテーテルの広告（斎藤方策）、蘭人の名刺、蘭文、蘭学関係者の詩箋などが無秩序に貼交せてあるものだけに、原本通り複製という本叢書の原則を破って改編されているが、反面見易くなつた利点も読者側にある。

登場人物を拾ってみても、大槻玄沢（和歌短冊、書簡）、同盤深（書簡）、同如電（添書）、坪井信道（詩箋、書簡）、宇田川玄隨（名刺）、同玄真（書簡）、同榕菴（前記）、岡研介（蘭文書簡）、伊東玄朴（書簡）、同方成（書簡）、湊長安（書簡）、広川獅（詩短冊）、華岡青洲（和歌短冊）、広瀬元恭（詩箋）、桂川国興（書簡）、松本良甫（書簡）、林洞海（書簡）、川本幸民（詩箋）、佐藤尚中（書簡）、同進（書簡）、小石元俊（和歌短冊）、同元瑞（書簡）、同中蔵（書簡包紙）、緒方洪庵（書簡、和歌短冊）、箕作阮

甫（詩箋）、長与専斎（書簡）、橋本綱常（詩箋）、シーボルト（封箋、書簡）等々の蘭学・洋学関係者のほか、本草家の小野蘭山、伊藤圭介、阿部友之進、栗本丹洲、足立天年、大阪屋四郎兵衛の名がみえ、また馬場貞由（書簡）、亜欧堂田善（牡丹図―原色口絵）、間重新（書簡）ほかが見える。解題には書簡類の読下しになされていないのは残念だが、読む楽しみと、その内容の活用が残されている。そのほかの稿本として、渡辺華山手扱本の小関三英訳『鑄人書』、宇田川榕菴訳『生石灰之解凝力』、榕菴自筆自画の『植物図』（原色版）が収められていて、榕菴の画才とともに、その研究の一端が窺われる。

解題は、冒頭に蘭学史の概説（編集委員会の要望によるものという）を収め、収載稿本類を洋学史研究会のメンバーの協力の下に、夫々解題されている。ただ、本解題では、前記シーボルトの手術を記録した宮原良碩の経歴を不明としているので、信州更級郡上山田町出身の良碩（一八〇六一―一八六）については、近く刊行される青木歳幸氏の論考（『蘭医宮原良碩とその周辺』『実学史研究Ⅲ』思文閣出版、一九八六年十二月刊）を読者は参照され、補充して頂きたい（青木論文では、前記の治療日記の活字化もなされている）。

なお、評者が本書の月報で紹介（「宇田川三代」）した同館蔵の『内科撰要、名物考、薬鏡之基礎』が本書に収められていないのは残念だが、まだまだ多く同館に蔵される医学や蘭学資料について、機会をとらえ複製刊行を望むや切なるものがある。

（宗田 一）

〔八木書店 一九八六年 B五判 一六、〇〇〇円〕

シンガー・アンダーウッド著 酒井シヅ・深瀬泰且訳
『医学の歴史』

本書は A Short History of Medicine by Charles Singer and E. Ashworth Underwood, 2nd ed., Oxford University Press 1962 の和訳全四巻であつて、一九八五年十一月から翌年十月にかけて出版された。第一巻扉には原書のタイトルページの写、各巻にはアンダーウッドの序をあげて訳者まえがき、目次、他巻目次とつづく。

シンガーの学風は原書初版序に記されている「メディカルサイエンスが社会においてしめる姿を理解するには歴史的な学び方が適している、ここでは医学の原理・アイデアを限られた紙数に示したい。この考え方はシンガーのその後の著書にもひきつがれている。

テキストブックが原理をつたえるものであるなら原書は典型的なそれであり、評価も高い。アンダーウッドによる第二版では本文七五五ページ中五五〇ページを十九世紀以降の記述にあて、図版二二葉、一四七の挿図（初版一四二図）は生理病理内外科など、どの教科書にみられる類であり、参考文献リスト（三五ページ）は学生は勿論研究者にも基本的文献を提供する。こうして第二版は学習に一層適する本となった。ガリソン・モートンはいう「シンガー一九二八は見事な総説、第二版一九六二は近年のあゆみを記し、文献リストも見事。

本書第一巻（二〇七ページ）の訳者副題は「古代から産業革命

まで」、医学の夜明け、古代ギリシヤ、ギリシヤを相続する人々、中世、科学の再生、統合の時代の六章からなる。第二、三、四巻は原書の第七章科学の細分化の時代の内容。第二巻（一七〇ページ）の副題は「メディカルサイエンスの時代①形態学・予防医学など」、第三巻（二五〇ページ）同じく「②細菌学・生理学など」、第四巻（一一〇ページ）同じく「③病理学・治療など」。第七章のあとにエピソード。そして附ノーベル受賞者（訳では一九八五まであげる）、図版と挿図リストが訳され、参考文献には和訳書があるもののリストがつけられている。各巻末には巻毎の人名と事項の索引をつける工夫がなされ、第四巻には人名と事項の通巻総索引があつて、ともに読者には有用である。各巻につけられた副題は内容の把握に役立つ。なお第四巻おわりの訳者深瀬博士によるあとがきにおいて、シンガーとアンダーウッドの小伝と原書に対する評価が記され、さらに本書が故小川鼎三教授の輪読会から生れたいきさつが語られている。以上、本書の要からわかるように、本書はすみずみに神経のいきとどいた訳書である。

原書の内容は本書の題名および副題が示すようにメディカルサイエンスについて英国の視点でもって、近代欧州を舞台として論じたものである。第七章科学の細分化の時代が予防医学の革命の記述（本書第二巻）をもつてはじまるように医学と社会とのかわりについても適当に述べられている。もっとも社会におけるフランスは英国医史、英国近代史の特質といえる。英国社会のように、異った社会の背骨の理解は容易でない。そして社会の理解は

「サイエンスの時代」の理解にも欠かせないことは留意されてよい。

シンガーとアンダーウッドについては訳者らの紹介が別所にもある（日本医学雑誌 第三二巻 三六一ページ、六一年七月）。訳者は順天堂大学医学部医学史研究室に属される。本書上梓による従来に倍加する貢献に対して心からの敬意を表する。

本書によって医学のあゆみの底流を学ぶことができる。分冊であって価は妥当、印刷製本は良く正誤表もそえられている。本書は身近において親しみ学ぶことのつきない本として、学生医師一般読者に広くお奨めしたい。

（栗本 宗治）

朝倉書店、一九八五—八六年刊 A五判

第一巻 三、六〇〇円 第二巻 三、六〇〇円

第三巻 三、六〇〇円 第四巻 三、六〇〇円

クロフォード・F・サムズ著 竹前栄治編訳『DDT革命』

本書はわが国の占領史研究において、空白になっていた医療福祉分野を埋めるべく、連合軍最高司令官総司令部公衆衛生福祉局長サムズ准将の回想録の一部（第四部Ⅱ極東・日本）を、この方面の研究に熱心な川前栄治教授が翻訳されたものである。

一般に回想録といえば、著者の過去の行為についての美化、正当化を強調しているものが多いが、本書ではこのようなあまりみられない。また事実誤認と思われる事柄について、訳者ができる限り調査し、コラムや注でそれを補っている。このような要素が、本書をして他の回想録と異り、戦後の医療福祉改革の歴史書として重要な役割を担わずにいたったと思われる。

さらには是非述べたいことは、本書によって戦争に勝った勝者が、敗北者に対して現実的に如何なる形で、医療福祉の改革を行っていったかということを生々しくできるといふことである。というのは、われわれは戦争に負けて日本の領土が勝者に占領されたという経験は一度もないからである。そして勝者の敗北者に対する態度について知ることが、今後われわれが外国と友好関係を保つ上に、貴重な示唆を与えてくれるものと確信する。

さて本書は通常の回想録と異って、幾つかの特色を有するが、解説で述べているように六つにまとめられる。第一には、本書は回想録であることと、戦後日本の医療福祉改革の理念や意図をGHQの側から照射している点にある。第二に本書は占領史研究の空白部分を埋める好資料である。第三に本書は、単に占領期の医療

福祉改革に関するGHQの意図や、日本人のそれへの対応を述べているだけでなく、アメリカの制度や理念を対比させている。したがって本書は一種の比較医療福祉政策論といえる。第四に本書は、今日の医療福祉制度の原点を明らかにするのみならず、DDT導入の動機、軍医ページの事態、日本脳炎命名の由来、発疹チフスが空气中に漂遊するシラミの糞によっても媒介されるということなどについて、初めて明らかにした。第五に本書をより充実にするためにコラムを二七箇所設けた。第六に本書の理解を深めるために年表を付した点である。ついで本書のタイトルを「DDT革命」としたわけについては、GHQの医療福祉政策によって、日本人の死亡率が減少し、体位が向上した。これらは環境衛生の改善の政策・行政指導も大きな力となっており、なかでも、病原菌の媒介物となったシラミ・ノミ・ハエ・蚊の駆除にDDTの導入ははかり知れない大きな役割を果たした。確かにDDTは日本人にとって敗戦の悲哀と屈辱感を深層心理に植えつけたシンボルとしてしばしば語られているが、日本人の健康維持、向上に必要な公衆衛生・環境衛生の改善に革命的な役割を果たしたということとは否定できない。よって本書のタイトルを「DDT革命」としたという。

現在、わが国の医療福祉は多くの点で見直すべき重大な転機を迎えているが、本書はこれらについて幾つかの重要な示唆を示してくれると確信している。医療福祉にたずさわっておられる方々には是非一読するよう、お奨めしたい。

(杉田 暉道)

〔岩波書店 一九八六年 B六判 四七二ページ 二、四〇〇円〕

原 三正著『オランダ留学生―若き日の津田真道―』

日本に近代法学を紹介し、法学者であるとともに法律の実務家で、また政治家として大成した津田真道（まみち）こと、旧津藩士津田真一郎（一八二九—一九〇三）についての伝記を、主としてオランダ留学時代および幕末・明治初期の青年時代に焦点をしばってまとめられたものである。

津田真道の伝記は、すでに昭和十五年、孫の津田道治によって『津田真道』（東京閣刊）がある。津田の著作については大久保利謙氏の「津田真道の著作についてⅠ・Ⅱ」帝国学士院紀事（三）三 昭和十九年、四の一 昭和二十一年）および「津田真道の著作について」日本学士院紀要第七巻一号昭和二十四年がある。

その業績については大久保利謙「幕末における日蘭文化交流が近代日本の形成に与えた寄与」とくに津田真道の業績を中心として『蘭学と日本文化』昭和四十六年東京大学出版会がある。財政経済面については大瀧利男「明治初期の外来思想と自由主義財政経済論の先駆者」とくに西周と津田真道を中心として『政経研究』第八巻三号昭和四十七年などのすぐれた論著が蘭学史研究家の手となっている。

この津田真道の小伝はこれら専門史家の研究業績をふまえての上で、幕末の中国地方の小藩の下級士族に生れた俊才が藩の儒臣となることに満足せず、西洋兵学という実学修業を足がかりとして、蘭学の修業へ傾斜してゆく経過を出身藩の詳細な資料を駆使してまとめている。蕃書取調所勤務となりオランダ留学を熱望し

て激しい自己推せんによって西周とともに法律・経済研究という人文科学を研修する留学生となるのであるが、このあたりの野望に燃えていた若き日の真道の行動を具体的に知る資料が掘り起こされてよいのではなからうか。渡蘭および帰国の航海については榎本武揚・沢太郎左衛門の日記や赤松則良半生談などによって真道が記述したところをよく補足してある。しかしオランダにおける二カ年間の修学についての記述が少し簡略すぎるようであるが、日本人留学生とオランダ市民の間にはさまれたポンペなどについての記述は公式型の研究論文とは異なった面白さを見せている。

オランダ・ライデン大学における人文科学修学の師であったンモン・フィッセルング（一八一八—一八八八）と真道との交流についての記述が少ないのは、本書が『幕末和蘭留学関係史料集成』（正）、（続）、大久保利謙編著、日蘭学会編、昭和五十七年（雄松堂刊）および、渡辺与五郎『シモン・フィッセルング研究』昭和六十年（文化書房博文社刊）が出版される以前に脱稿されたためであろう。

真道とフィッセルング教授との学問的關係およびオランダでの真道の動行をより詳細に知るためには、これらの著書が補強してくれている。特に渡辺与五郎氏の著作はオランダ現地所蔵根本資料と实地調査によって裏づけられているので、オランダ・ライデンにおける真道の動きを知る上で重要である。津田と同時留学の西周（一八二九—一九七）の史伝、森鷗外の『西周』と併読することによって本書はよりその価値が高まると考えられる。

津田は『泰西国法論』慶応四年刊、『表記提綱』明治七年刊の翻訳出版など手堅い学術業績と文官の実務をこなし、政変の中にあっても身の処し方を誤らず、明治二年には刑法官権判事となり新律綱領編纂につき、学制取調御用掛・外務大丞・司法省中判事、六明社の結成、元老院議員・民法制定・陸軍治罪法の制定・高等法院陪席裁判官・衆議院議員・貴族議員など文官として多面的な活躍をしたことが、本書でも要領よくまとめられている。また和魂洋才をそなえ持った萬葉調歌人としての津田の一面を紹介することを著者は忘れていないのは心温まる。

末尾の年譜略記および参考資料目録も後学に役立つ。日本蘭学史の大きな背景を紹介しつつ人文科学者と法律実務家の二役をこなした一先覚の伝記として一応まとまっている。

著者は津田と同国岡山県美作鏡野町出身である。民俗学、地方史、古代史など既刊図書四十九冊という筆力のある博学多識の内科医である。すでに津田真道の同族の歌人大家大門についても『道家大門』『道家大門八尺集』などの著作がある。郷土の先賢顕彰の労作として、積年のご努力を多としたい。

津田一族の系図、遺墨、出生地、および一族の写真、著書の図版なども豊富に収録されている。序文は治郎丸憲三氏、跋文は本会評議員石田純郎氏。

（蒲原 宏）

A五判 一六六頁 千円 送料二百円 一九八六年
発行所 二七—〇—〇一 倉敷市林四二 齒族社
振替口座岡山五一七四四九番

昼田源四郎著『疫 病と狐憑き 近世庶民の医療事情』

昼田さんが「あとがき」にかいているつぎの文章が、本書の狙いをしめしている。――

わが国の医学の歴史については、すでに数多くの研究が出されている。しかし、そのほとんどが医学典籍や著名な医学者についての研究、あるいは医療制度についての研究といったものであり、一般民衆の医療事情がどういうものだったかといった、医療を受ける側に視点をすえた歴史研究は極めて乏しいのが現状である。日本医史学会を中核とする医学史研究が半世紀以上にわたる歴史をもち、また民衆史研究が近年ますます声高に叫ばれている状況での、この民衆医療史ともいべき分野への等閑視は、はなはだ残念なことである。本書はこうした分野への、ひとつのささやかな試みである。

偉人は歴史の結節点の一つであっても、歴史が偉人史であってはならない。といって、民衆医療史を構築していく素材をどこにもとめるべきか。川柳、随筆や過去帳にあるのは挿話や一断面にすぎない。昼田さんは、奥州守山領(現・福島県郡山市の一部)の「御用留帳」(元禄一六年(一七〇三年)から慶応三年(一八六七年)にいたる計一四二冊を資料として、東北一寒村の人びとの生活、生と死、そして狂気をえがきだしている。

一九七九年の国際比較医学史シンポジウム(谷口財団後援)は「精神医学史——精神疾患とその治療」が主題で、そこで昼田さんからしかに、このお仕事につき報告をうかがうことができた。

また本書の核心をなす部分は『精神神経学雑誌』第八六巻でよませていただいた。だが、本書では昼田さんの研究成果がもっとひろくのべられている。

目次をあげると、「奥州守山領/村人たちの暮らし」、「医師教/医道修業/医業渡世願い/乱診乱療事件」、「疫病/藩の対応/祈禱」、「治療のための他出/湯治」、「乱心/狐憑き/指籠入れ」、「受刑者治療」、「行倒れ/病者の継ぎ送り」、「間引き/養育御手当金/養老年金/病者への施米」となっていて、まさに民衆医療史というべき内容である。

民俗精神医学の建設を目ざしておられる昼田さんは、民衆の狂気観をさぐっている。それがどんなものかは、本書をよんでいただくほうがよい。精神病ないし精神病的状態をしめす用語で「狐付」は五九事例中一〇回だったという。こういう頻度は、その地域によって大幅にちがうのだろう。精神病患者の指籠(座敷牢)入れには、かなり厳密な手続きが制度されていたとの指摘も重要である(この手続きについては先学、山崎佐「精神病者処遇考」、『神経学雑誌』第三三—三四巻、が詳論していることとふれられていないのは手落ちであろう)。当時の手続きが、精神病者監護法にどうつながっていくか、おおきな問題である。

わたしが書評につかった本書は第四刷である。また昼田さんは『精神神経学雑誌』とかかれた論文で学位をえられたときく。ともにもこういつた研究が正当な評価をえたものとして、お祝いをもうしあげたい。

(岡田 靖雄)

みすず書房・東京 一九八五年一〇月 B五判
一七八ページ 一、五〇〇円

本書は、本草家で幕府の医官であった田村藍水（一七一八～七六六）、西湖（一七三九～九三）にかかわる編年体で編集された公用記録である。原本の表紙には「万年帳」と書かれている。原本は三巻三冊で、子孫の田村惟士氏が所蔵するものである。

本書は、「万年帳」を校訂、翻刻し、内容がわかるような表題にしたものである。校訂註、人名・地名などの傍註のほか、本文欄外に、本文中の主要な事項なども標出し、利用の便をはかっている。「万年帳」は、藍水が幕府医官に登用された日、宝暦十三（一七六三）年六月二日から、長男である西湖の代の寛政三（一七九一）年正月二日までの記録が載っている。巻一本文一三〇丁、巻二本文二二六丁、巻三本文一一五丁である。

田村藍水は、名が登、通称元雄、字は元臺、藍水は号である。小普請方棟梁大谷出雲の次男で、町医田村家の養子となった。田村家の遠祖が坂上田村麻呂であるので、坂上姓を名乗ったりもした。阿部将翁に本草を学び、医学は後世方の道三流を修めた。若年から薬用人参に関心をもち、『人参譜』、『人参耕作記』などを著し、人参の製薬にも努力し、『参製秘録』を著している。

宝暦七（一七五七）年、江戸ではじめて薬品会を開いた。弟子平賀源内の企画によるといわれる。宝暦十三（一七六三）年、当時幕府は、朝鮮人参人工栽培を中心とした国産有用自然物開発の殖産興業政策をおし進めているなか、藍水を朝鮮人参の専門家として登用した。藍水四六歳のときである。藍水は、人参栽培ばかりでなく、人参製法所の管理者として活躍した。また幕命で全国

三十八州に出張し、その間人参以外の植物の研究調査を行なっている。江戸時代の実地派本草家の代表的人物である。

藍水には二人の男子がある。長男が西湖、次男が奥医師栗本昌友の養子となった丹州である。西湖は、名が善之、通称元長、号が西湖である。父と同じく、医者で本草家。父が医官となつてから、人参製法所に勤め、父没後、その後を継ぎ、奥詰御番医師次席まで昇進した。薬品会を開くなど、本草家として名をあげ、伊豆諸島を調査、『豆州諸島産物図説』を著している。西湖の長男は元慶で、人参製法所に勤めた。栗本丹州も、医師、本草家として活躍、動物学の著作を多くのこしている。

本書は、藍水、西湖、元慶が、幕府にかかわつた公的記録で、公用の書留を、後年抜粋して編集したものである。内容は、藍水が召出された記録にはじまり、明細書、親類書、伺書、願書、書上、薬種拝領記録、献上物、出張記録など多種に及ぶ。しかし、幕府とのかかわりに限定されていることは、公用日記の表題からわかるであろう。

この記録は、藍水仕官以後、西湖の伊豆諸島調査の直前までのものである。そのことから「万年帳」は、寛政重修家譜編集の準備作業としての寛政三年五月の先祖書の徴集令によって幕府に提出した書類と関係があらうと解題者は推測している。田村家の動向、当時の殖産興業政策の内容、当時の本草家と本草など、この史料から新しい具体的事実を読むことができる筈である。巻末に草野、藤田両氏の有益な解題がある。

史料集 79

統群書類従完成会

東京

A五判 三二二頁

七、四〇〇円 一九八六年十一月刊

（矢部 一郎）

本書は、単にわが国の痘苗史に関する資料を集めて紹介したのではなく、近代ウイルス学の立場から日本の痘苗史を検討し、解説されたものである。本書の題を敢えて痘苗史とされたのは、おそらく著者が北里研究所において半世紀にわたって指導的な立場で従事してこられた痘苗の研究と製造の体験をふり返られることであろう。つまり少なくとも昭和以降の痘苗史を語るに最も相応しい著者を得たといふべきである。

先ずわが国におけるジェンナー以前の痘瘡への対応や、人痘種痘法にも触れたあと、ジェンナー以後、わが国の牛痘種痘法の伝来に関する諸説につき、文献的ウイルス学的検討がなされており、特に中川五郎治の用いた種痘材料を人痘材料とするに至った根拠の論述は、説得力に富むものであり、本書の一つの山をなしている。著者が最も多くの頁を費やされたのは、第四章の「痘苗の伝達と保存」であり、おそらく自らの体験と、北里研究所の豊富な資料を中心にして、戦前の痘苗製造の変遷が克明に紹介されている。そして第五章と第六章において、第二次大戦後、GHQの指令による痘苗基準の改定に始まり、わが国の研究者が貢献した弱毒痘苗株の研究、更にWHOの瘡痘根絶計画に対するわが国の貢献、根絶の推進に有用であった乾燥痘苗、種痘手技などが詳述されており、次いで、深刻な社会問題となった種痘の副作用とその対応についても述べられている。同じ時代を生きた者として既にこれらの事が、医学史として語られるに至ったかとの感慨は

深い。

第七章の「牛痘種痘に用いられたウイルスと牛痘ウイルス」の項は、ポックスウイルス研究者としての著者の見解が述べられており、同じ課題に関心をもつ私にとって最も興味深い箇所でもある。ジェンナー時代の牛痘種痘材料やウマのグリースの材料と、現代ウイルス学の定義する牛痘ウイルスやワクチニアウイルスの関係、また牛痘ウイルスやワクチニアウイルスの由来など近代ウイルス学における最大のミステリーとしても興味はつきない。

著者も述べているように、種痘ウイルスが痘瘡予防のために再び用いられることは、期待も含めてのことではあるが、先ず考え難いものである。ところで現在少なくとも四つの観点から種痘ウイルスに対する関心はよみがえりつつある。第一は、アフリカの主として小児に発生しているサル痘である。死亡率は十数%に及んでおり、この予防ワクチンとして種痘が望まれることはいう迄もない。第二は、パオレットイラにより開発された組み換え遺伝子ワクチニアウイルスワクチンであり、第三は、ブロンキストラにより見出されたワクチニアウイルス誘導細胞増殖因子である。そして第四は、私達が現在取り組んでいる種痘ウイルス修飾癌細胞ワクチンの開発研究である。この何れの研究を展開させるにせよ痘苗の開発と製造法の推移に関して詳述された本書は、医学史の書としてだけでなく、ウイルス学の書としても有用なものであると考える。

(加藤 四郎)

近代出版 一九八七年 A 五判
二〇〇ページ 三、〇〇〇円

春日忠善著『日本のペスト流行史』

今回、春日忠善氏により北里メディカルニュースより出版された本書は、我々が知りたいと思っても容易に資料の入手できない明治三二年より昭和五年にかけて日本の各地でのペスト患者の発生させ、当時の国民を恐怖に陥れた日本国内のペスト流行の実態を正確な資料にもとづき明らかにした点で時宜に適したものである。

というのは、当時ペスト防疫の第一線に活躍された専門家の中で、春日氏は明確な記憶を持ち、資料を発掘し、書きとめていただけのほとんど唯一の生証人であられるからである。

この書物がでなければ日本のペスト流行史は埋れたままとなり、後世日本のペスト流行の全体像はつかめないままとなたである。

本書は読物風にはまとめておらず、むしろ著者の主観を混ぜぬ資料集の形をとり、一見ペスト流行に関する記録や報告の集積のように見える。何々郡某々村で明治何年にペスト有菌鼠が何頭とれたという一次資料が本書の大半をしめているのは医史学の単行本としては異例であろう。しかし従来一次資料が全く世に出ず、唯一のまとまった資料の昭和四年内務省編の「日本内地ノペスト流行ニ関スル調査」が入手困難である今日これはこれなりの意義がある。

ペスト流行に関する文明的考察はマクネイルの「Plagues and people」や村上陽一郎「ペスト大流行」、サンドライユの「病の文

化史」などに興味深く述べられているが、過去に三百年おきにおこった三回の世界的流行のうち、はじめ二回は大陸との交通の杜絶した島国の故に流行を免かれた日本が、中国大陸に始まりインド大陸に猛威をふるった三度目の大流行時にはすでに船舶による世界貿易の時期でその波及を免かれず、インド、香港經由の船舶に便乗した有菌鼠が日本各地の港に上陸して流行の発端をつくりながら、すでに近代医学の時代を迎えた日本では、迅速な患者の発見、隔離、ペスト鼠の根絶、海港検疫の強化により、いち早く流行を三千名程度の感染者に抑えこむことができた事が本書によりよく判る。

三百年周期説によれば、又二三世紀に起こり得る次の流行のためにも本書は貴重なペスト防疫の参考資料となる。

しかしペスト流行史には依然として多くの謎がある。如何なる条件で腺ペストが肺ペストに変わってゆくのか。何がペスト流行を終焉させるのか、流行周期とは何かなどであり、本書においても謎はそのままに残されている。

著者は又旧満州でペスト防疫活動をされた体験より、特に満州の流行情況に数頁をさいている。これも他の成書には見られぬ資料で、かつて私はクリステイーの奉天三十年に出てくる黒死病の背景をペスト流行史の中に確かめようとして既存の成書では果さなかつた経験を持つが本資料によりはじめてその背景を知ることができた。

本書には又北里柴三郎の香港においてペスト菌発見の一八九四年のランセットにのせた速報が転載されており、ペスト菌発見の

経緯を知らうとする者には有益な資料である。言外に青山胤通との對抗意識と功をあせる北里の筆致を伺わせる。病原体発見の報的性格のこの報文は、詳細は後日を期すとしながら、直後に出したイエルサンのよりフォーマルで整ったペスト病原体の記載によって遂に詳細が出ずじまいになったことはかえすがえすも悔やまれることであるが、若しこの子報が出ていなければ、事実上の最初の発見者としての北里の名は残らなかつたであろうから、歴史的文献としては価値あるものである。

日本ペスト流行史とははずれるが、旧日本陸軍は悪名高き七三一部隊において、このペストを人命殺傷の道具として使用することを企て、日本のペスト防疫の知識を逆用しノミの飽育増殖の専門家、細菌学者を平房に集めて研究させ、有毒ノミを陶製爆弾につめては捕虜をつかって効果をたしかめていたことが戦後明らかになったことは日本のペスト研究史の一大汚点であろう。

本書を通読して今更ながら異様に思うのは戦前の衛生行政が警察行政の一端であり、鼠の買上げも巡査派出所が行なっていた事実である。国家社会の秩序維持のために権力を行使して防疫活動を行う日本の公衆衛生の体質は、戦後も底流として残っており、最近のエイズ防疫のための法規制の動きなどにも現われているといわねばなるまい。

(大島 智夫)

〔北里メデイカルニュース編集部 一九八六年〕
A五判 一六六ページ

伴 忠康著『医学のあゆみ』

本書は「適塾をめぐる人々」の著者として高名な伴忠康博士が、永年の医学教育の土壤をもとに刊行されたもので、副題に「日本の医学教育によせて」が付されている。

第二次大戦後に、比較的に保守的な医学系の大学から大学紛争が始められた。これを契機に医学のあり方への反省が強く求められた。「医の倫理」が問題化されて「医学概論」さらにその基礎になる「医学の歴史」の教育が重要視されてきた。医学史を見つめて医師のあり方を再認識するという学問が「医学概論」という分野である。——これは本書の前文の一節であるが、著者が阪大医学部退官後、兵庫医科大学長として医学生に医学概論の重要性を強調された片鱗といえる。

また、一九四一年から阪大で解剖学を教育し、「その頃から医学生のアリエンテーションに医学史を教えることが必要であると考えた。そのために世界史の他に、最終的には大阪の医学史を説明することに努めた」、「昭和二十一年、第二次世界大戦から無事教室に帰ることができた。シンガポールやビルマで種々の体験をえて帰ってきた。この頃から解剖学教育の分担が増加した。適塾の修復につとめるかたわら世界の医学史と医の倫理の教育に尽力した。そして厚い講義のノートができ、適塾をめぐる人々（一九七八）、高松凌雲と適塾（一九八〇）などの単行本を刊行することができた」とあるように、本書の随所に医学史が如何に医学教育に必要かが述べられている。ついでに、本書は著者の四十余年に

わたる医学教育の中から生れるべくして誕生したといつてよい。

第一部の医学の歴史の章は「世界の医学」「日本の医学」が骨子と成っており、内容は要説的であるため、医学教育者にとつては、教育面で直ちに役立つ点特徴である。著者は阪大で黒津敏行教授に比較神経学、中樞神経学を学ぶが、京大では木原均教授に農林生物学、駒井卓教授に遺伝学の指導を受けているので、見識の広い解剖学者といえる。第一部第四章の「解剖学が医学の基礎になる」など、解剖学者としての矜持に接した思いがする。

第二部は「日本の医学教育に関する白書」である。この白書は全国医学部長病院院長会議の「医学部のあり方委員会」（伴忠康委員長）が十年間審議したもので、一九七九年刊行されたが、これは現代から将来に向けて、日本における医学教育のあり方を知る上で、貴重な資料である。

筆者は既に「いずみ」（藤沢薬品）に、著者が連載執筆（一九八〇年より四十回）の随筆「医学放談」を各月読んで、面識はないが著者の重厚で謙譲な人柄に、誌面から接することができた。この「医学放談」の中から十四篇が、本書のコラム欄として随所に掲載されている。とかく、固い印象を与える歴史的記述の中で、これらのコラムは脈々と生きている。

著者は青年期に京都独立美術協会に入り、以来今日まで地道に活動を続け、斯界では女人はだしの評もある。従つて、本書の表紙やカットはすべて著者の作品である。さらに題字は治子夫人（蘆舟）の筆によるが、ここにも、人間愛の一つの結晶をみるこ

（寺畑 喜朔）

創元社 一九八四年 A五判

二三四ページ 一、八〇〇円

〔新刊紹介〕

吉富兵衛 著『和訓 万病回春』

日本の漢方が中国医学の模倣を離れて、独自の歩みを始めたのは、曲直瀬道三によつたとされる。以後、多くの先人が、医術に関する口訣を残し、日本漢方の特色の一つとなった。

長沢道寿が著した「愚按口訣集」（医方口訣ともいう）は、ごく初期の日本漢方の口訣集である。

この道寿が、医学に発奮した動機を、浅田宗伯が皇国名医伝（上巻）に記している。それによると、若い頃の道寿は才気煥発で自負心が強かった。その頃近隣に居た一老医を、人々が名医だというので、試しに自分が治せない難病の患者を、次次と其の人に紹介してみたところ、その難病が皆治ってしまった。そこで初めて己れの技の拙さに気付いて、老医の門に教えを請うた。ところが老医は、その入門の願いを断つて、「私には、その様な力などありません。ただ、若い時から万病回春を常に読んでいて、手から離したことがありません。それなのにいまだに得たものは僅かしかありません。とても人に教えることなど出来ません」と云つて、手にした万病回春を見せた。

見ると、その回春八巻が、綴じ糸は切れ、紙は傷んでボロボロであった。道寿は驚くと共に己れのそれ迄の慢心を恥じた。恐らく、その後に、道寿は曲直瀬正紹（玄朔、二代道三）に入門するため、土佐から京へ上つたのであろう。やがて土佐道寿とうたわれる名医になった。

万病回春は明の龔廷賢（きんていけん）の著書である。明代の医学には、宋代の和剂局方、金・元代の温補派といわれる李朱医学、寒涼派といわれる劉張医学等が完成していた。万病回春は、これら明代の医学を総合して、大成させたといえよう。

日本漢方は、曲直瀬道三が李朱医学を基本にして日本化し、道三流として発足し、のちに後世方とよばれたものが、先発の学統であった。（その後、傷寒雜病論を基本とする古方が発生した。）

後世方は、李朱医学の祖・李東垣の書（東垣十書等）は当然オリジナルとしたはずであるが、龔廷賢の万病回春を、深く参照にしていると思われ、これは今日に迄及んでいる。現在の漢方で、常用処方の一つになっている加味逍遙散は、和剂局方に、婦人に用いる薬・逍遙散として収載されたものが元で、これに牡丹皮、山梔子を加えて加味逍遙散としたのは龔廷賢らしい。その他にも、現代の常用処方で、万病回春から引用されたものは少くない。

万病回春は、江戸時代に多くの医者に読まれたらしく、種々な翻刻本が残っていて、そのことを証拠立てている。この書物の価値は、現代の漢方研究者にとっても同様である。

ところが、この書物は、当然のことながら漢文で書かれている。若手の研究者はもとよりと思うが、我々でも、完全な解読には、かなりの努力が要る。

最近、この万病回春が、全八巻和訓されて出版された。これは、誠に意義ある著作である。

巻頭（巻一）の総論ともいうべき「万金一統述」などが、大変楽に読むことができる。巻二以降は病名（昔の）又は症候別の治

療解説であり、この点が本書の特色で、且つ臨床上参考になるのである。
（山田 光胤）

〔山内薬局 唐津市京町一七〇一の五〕
八、五〇〇円 送料 三五〇円

馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書（肆）』

一九七二年四月、中国湖南省長沙市の東郊外約四kmの地点・馬王堆の台地より発掘された二一〇〇年以上昔の未腐乱女性屍体は、当時その奇跡が世界に与えた衝撃とともに今も我々の記憶に新しい。そして翌一九七三年十二月、第一号・二号に続き発掘された第三号漢墓より出土した二四種に上る多量の帛書・木竹簡等の古文獻は、その後の古代中国史研究に計り知れぬほどの貴重な資料を斯界に提供することとなった。かつそれらの少なからぬ部分が医学関係文獻であったことは、伝承文獻では漢代はおろか六朝時代すら正確に遡ることが極めて困難であった中国医学の史的研究にとって、まさしく驚異的出来事であった。

一九七五年以降、中国ではいくつかの雑誌や書物にそれらの部分的写真や釈文・論考等が発表され、またわが国でも中国発表資料に基づき研究がなされてきたが、公開された写真は一部に限られていたため隔靴搔痒の感はどうしても免れ得なかった。しかし本書の出版により全出土医学文獻が影印され、今その全貌が我々にもようやく明らかにされたのである。また本書には各々の釈文と注釈も収録されている。本書の「出版説明」（一九八一年七月記）によると、それらの整理・釈文・注釈に参加した主要メンバーは唐蘭・李学勤・馬繼興・周世榮の四氏である。各氏はいずれも馬王堆医書等の研究活動で我々にも馴染み深いが、唐氏は故宫博物院前院長で七〇年代に逝去されている。李氏は中国社会科学院歴史研究所長・教授、馬氏は中国中医研究院医史文獻研究所前

副所長（現教授）、周氏は湖南省博物館研究員である。釈文および抄写年代の判定は古文字学者の李氏が主に担当、馬氏らは主に医学文獻による注釈に参加したとのことである。

さて本書の構成は前半が出土した医学文獻全一五種の影印図版頁、後半が各々の釈文・注釈頁となっている。これら一五文獻本来の書名はいずれも不詳であるが、各々にはその内容や冒頭の語句等より仮称が与えられている。そこでまず各文獻の出土状態と仮称、および整理・影印の概容を本書での収載順に述べておこう。

第一帛書・高約二四cm・寛約四五〇cm。出土時に畳み目より断裂し、三〇余の裂片に分かれている。字体は篆書に近く、およそ秦漢間頃の抄写と判断されている。当帛書の記載は内容より次の五文獻に分けられて影印。①『足臂十一脈灸經』（二裂片で、本書図版は各々を現寸に影印。第一片は現寸大でカラーグラビアにも収載）。②『陰陽十一脈灸經』甲本、③『脈法』、④『陰陽脈死候』（以上三文獻は大きく三裂片に分かれ、図版では各々を現寸で影印）。⑤『五十二病方』（複雑に断裂しており、全体は二九の図版に現寸で影印）。

第二帛書・高約四九cm・寛約一一〇cm。出土時に多くの大小不等の破片になってしまったがシミや畳み目・帛の織目等より各片の位置が復元された。字体より漢初の抄写と考察されており、記載は次の三文獻に分けられている。⑥『却穀食氣』、⑦『陰陽十一脈灸經』乙本（以上三文獻は当帛書片面の約一分の一に相当する部分に記載され、本書では該当部分を約二分の一に縮小し一図版

に影印)。⑧『導引図』(前掲)⑥⑦文献の裏面に、彩色で当帛書の約一分の一〇に相当の面積に記されている。本書では該当部を約二分の一に縮小し四図版に影印するが、その現寸大カラー図版および復元図は一九七九年に文物出版社より公刊されている。

第三帛書・高約二四cm・寛不詳。出土後に大部分が裂砕し、多数の小片となっている。記載文献は⑨『養生方』と命名され、本書ではそれらを一六の図版に分け現寸大影印している。

第四帛書・高約二四cm・寛不詳。出土後に裂砕して多くの断片となっている。記載文献は⑩『雜療方』と命名され、本書ではその断片を六図版、および位置未詳残片四四枚を一図版に現寸影印している。

第五帛書・高約四九cm・寛約四九cm。字体が雲夢縣睡虎地出土の秦簡に近似することより、抄写年は漢よりも秦代に近いと推測されている。当帛書に記載の図および文字は⑪『胎産書』と命名されている。全体は大きく四裂版に分かれ、本書では各々が現寸大の図版に影印されている他、全体はカラーグラビアにも縮印されているが印刷の不鮮明なのは誠に残念である。

竹簡一卷・当巻は一三三枚の竹簡より成り、前一〇一枚は⑫『十問』、後三二枚は⑬『合陰陽』と命名されている。いずれも現寸大に影印され、⑭は九の図版、⑮は三図版となっている。

木竹簡一卷・当巻は計六七枚の木竹簡より成り、前一一枚は木簡で⑯『雜禁方』、後五六枚は竹簡で⑰『天下至道談』と命名されている。本書ではいずれも現寸大に影印され、⑱について各木簡毎にその模写図も附し二図版に、⑲は五図版となっている。

以上一五文献中、①～⑦は全文の積文・注と部分的写真が既に『文物』誌(一九七五年、第六・九期)および『馬王堆漢墓帛書・五十二病方』(馬王堆漢墓帛書整理小組編、文物出版社、北京、一九七九)にて公開出版。また⑧も前述のごとく全形のカラー図版・復元図版が公刊されている。⑨～⑪は写真・積文注ともに本書が初公開、⑫～⑮は周世榮氏個人による積文が内部刊行誌『馬王堆醫書研究專刊』第二輯、長沙馬王堆醫書研究組編、湖南中医学院刊、一九八一)に掲載されたことがあったが、当誌は湖南省博物館(長沙市)でのみ販売され、中国内でも一般に入手不能であった。しかし今回その全写真が公開されただけでなく、本書の積文・注により周氏の積文には相当の問題のあったことが知られた。⑯～⑰の文献が発掘後十数年も経てからようやく公開されたのは、恐らくその内容の多くが房中や巫術に関するためと思われるが、ともあれ本書にこれらも収録された意義は大きい。

次に各々の内容であるが、これについては馬繼興氏(馬王堆出土的古医書、『中華医史雜誌』第一〇卷第一期、一九八〇)の紹介にほぼ尽くされており、またこれまで日中双国で数多くの論考がなされているので、あえて贅言を呈すまでもなからう。なお①～⑦と⑫～⑮については、山田慶児・赤堀昭・坂出祥伸・中嶋隆藏・麦谷邦夫氏らの共同研究による注釈と和訳が『新發現中国科学史資料の研究・訳注篇』(山田慶児編、京都大学人文科学研究所発行、一九八五)中に収録・発表されている。それら訳注は本書の公刊以前になされたため、多くの部分は実物写真ではなく既発表の積文等を基に考釈されている。それゆえ今後の校訂に俟つ

べき部分もあるとは思われるが、中国の積文・注釈を踏まえた上でのその詳細な注と訳には是とすべき見解が多い。今後の研究において、それらの労作は本書とともに必須の資料といえよう。

ところで『文物』誌一九八五年第一期の報告によると、一九八三年末に湖北省江陵县張家山で発見された三基の前漢代墓葬より千を越える竹簡が出土。その中には馬王堆帛書の②④⑦に相当する『脈書』（仮称）と⑧に関連する『引書』（仮称）が含まれ、馬王堆帛書の欠損文字がほぼ補足できるなど、かなりの不詳が明らかにされ得ることである。全体の積文や写真の公開にはまだ数年を要すると思われるが、これにより従来馬王堆医書の研究報告はいささかの修正を余儀なくされるであらう。

以上、本書の性格上、概要紹介に兼ねて関連文献・報告に言及したが、馬王堆医書の真価は現存最古の体系立った中国医学文献という点にあることはいささかでもない。そしてこの点において、本書は東洋医学とその史的研究にとって他の基本古医籍と同等、あるいはそれら以上の価値を有する古典と評しても過言ではなからう。

（真柳 誠）

文物出版社 北京 B四判 総二九三頁
一九八五年三月 第一版 四四元

例会の演題募集

毎月第四土曜日（原則として）午後二時～五時まで例会（主として順天堂大学にて）を行っております。毎回二～三名の先生方に講演をいただいております。

発表希望の方は演題を添えて事務局宛にお申し出下さいませようお願いします。